

★公開座談会

## 谷川俊太郎氏を囲んで

詩人、谷川俊太郎氏は現在、放送台本、翻訳、児童文学分野など、多方面にわたって御活躍中です。昨年のお茶の水女子大学の微音祭（大学祭）で、学生たちとの座談会が持たれ、氏の文学観、子ども観などいろいろかがう機会がありました。

ここでは、紙面の都合上、谷川氏が最近翻訳された『マザーグース』についてと、子どものための詩についてと、特に二つの質問を取り上げてみました。

質問一 今、谷川さんというと『マザー

グース』と浮かんでくる人が多いと思います。私は英語のもっている響きとか、リズムとかを大変生かしている『マザーグース』を日本語にうつすということは大変困難なことだと思います。それを谷川さんが手がけられたというのは、どういうところにひかれたからでしょうか。また日本語で表現するのにどんな御苦労があったでしょうか。それから、こういうのは犠牲にしても、これだけは読む人に伝えたいと思われたところがありましたら、そういう点についてうかがいたいと思います。

谷川氏 今や僕は「マザーグースの谷川さん」になってしまつて……ほんと、そうなの。僕は前は「鉄腕アトム」の谷川さん”だったんですよ、皆さんがまだ赤ん坊の頃は。それから「スヌーピー」の谷川さ

ん”になって、『マザーグース』の谷川さん  
になった。あの、僕は詩も書いているので、  
詩の方も読んで下さい。(笑)

それで何故訳しかかってよく聞かれるん  
だけれども、僕は一応物を書いて生活して  
いる人間だから、直接的には出版社から注  
文があったという、非常にみもふたもない  
答えになっちゃうんですけどね。ただまあ  
それだけではないことも確かなんで、僕が  
いつ頃から『マザーグース』に興味をもっ  
ていたかというと、やっぱり詩を書き始め  
たのとほとんど同時位だったという記憶が  
あるのね。いつ頃から知っていたかとい  
うと、多分僕は小学生の頃からマザーグ  
ースという言葉は知っていたのではないかと  
思う。それがどういふものかといふところ  
まで知っていたかどうかはよくわからない  
だけれど。とにかく、北原白秋とか竹久夢  
二の訳というのは、僕が子どもの頃には、  
児童文庫とかそういうものがすでにあっ

て、家はまあ中流でインテリ家庭だから  
ね、そういう『マザーグース』の一編や二  
編が訳されている子どもの本が、周囲に多  
分あったと思うんです。それから、キラキ  
ラ星とか、ロンドン橋なんというのが、  
『マザーグース』のメロディーなんだとす  
ると、そういうものも、やはり家の母がひ  
くピアノかなんかで聞いていたというふう  
な記憶があるんですよ。だから、子ども  
の頃からなんとなく親しみは感じていたと  
思います。ただ僕はミッションスクールみ  
たいなところにいったわけではないし、す  
ぐに、戦争が始まってしまったから、具体  
的に、例えば英語を母国語とする人から、  
身振りとか遊びとか、あるいは抑揚とかそ  
ういふものを伴って、直接的に受けとった  
という記憶は全くないわけね。だから詩を  
書き始めた頃の関心の持ち方も簡単にい  
とわりあい本から得た知識ですね。直接的  
に自分の詩の書き方と関わるような、そう

いう関心のもち方だったと思うのです。  
とにかく『マザーグース』とよばれる一  
群の口から口へ伝えられてきた伝承詩は、  
我々日本の現代詩人が書く詩とは全く成り  
立ち方が違いますね。僕らは、個性とか自  
己表現とか、自分の、つまり人間認識とか  
状況とか、自分というものが世界の中心に  
あって、そこから詩というものを考えてい  
たわけね。つまり自分の中に詩があるんじ  
ゃあないかと考えて詩を書いていたわけだ  
けれども、『マザーグース』というのは、  
どうも作者なんてわからないのがほとんど  
だし、それから何百年もの間語り伝えられ  
てきていて、つまり正しい原詩なんていう  
のもいっただい、どれか良くわからないし、そ  
の中には作者の自己表現なんてものはどう  
もひとかけらもないみたいで、英語という  
言語の豊かさが『マザーグース』を詩とし  
て成立させていて、そういうふうに、自分  
の中から出てくる詩というよりむしろ、言

語そのものの中に内在している詩といふのか？ ちょっと妙な言い方なんだけれども、そういう詩の在り方というのが、我々の書いている詩とは全然違う対照的なところにあるのではないかという一種の憧れと不安ともいえる、非常に気になる存在だったわけですね。

もちろん、日本のわらべ歌とか、あるいは英米語圏に限らない他の文化圏でのわらべ歌なんかも、当然似たような意味もっているはずのものなんだけれども、僕はそういうものを全部知っているわけではないし、全部を原語で読めるわけでもないの、直接的には日本のわらべ歌とマザーグースの比較にどうしてもなるのですけれどもね。『マザーグース』が日本のわらべ歌よりどうして魅力的だったかという、日本のわらべ歌は日本人にとってあまりにも身近にあるものだから、どうも対象化しにくいし、そこから受ける魅力というもの

も、もういっぺん自分がよっぽど意識して新しい目で見直さないとつかめないといふところがあるけれども、それをぬぎにしても『マザーグース』は、ほんとうに人間くさかった、そこが魅力ですよ。

わらべ歌でうたわれている事柄とか言葉なんか、現代詩とどういうふうに関係をつけてよいかわからなかった時に、『マザーグース』でうたわれている事柄はそのまま現代でも通用しそうな感じがしてたんですね、本能的に。だからよけいに『マザーグース』というものが気になっていたのではないかと思うの。でも、自分で、『マザーグース』を翻訳して日本語になおそうという気持ちには、つながらなかつたわけね。僕にとっては、現代日本語の世界で、『マザーグース』にあたるようなものをどうにかして書けないだろうかという関心につきていたわけですね。そういうところ出版社から注文がきたわけで、自分にとっては

今までなんとなく気にはなっていたんだけど、体系的に勉強しなかつた『マザーグース』というものを勉強する良い機会だと思つてひきうけたんです。それがもう五、六年前で、その時に最初何十編か訳して、それからもう訳す作業自体がすごくおもしろいし、自分にとつてもいろいろな問題をふくんでいるということがわかつたものだから、少しずつ訳してたまつていたわけ。まあそういうふうにして訳し始めたわけね。

それから、質問は何だったかな？

質問者 日本語にうつす時にリズムが全然違うことについて、どう苦心なさつたでしょうか。

谷川氏 ああ、そうか、そうか、

だから、僕はもうもともと基本的に、日本語にうつすということは不可能だと思つ

ているわけですよ。不可能だという前提にたってやっているわけね。それはおそらく詩の翻訳全部についていえることだと思っただけれども。ただ不可能だというふうにいても、比較的翻訳可能なものと、全く翻訳不可能なものというふうに、その間にいろいろ段階がありますね。

例えば早口言葉的なものはほとんど翻訳不可能だね。だからもとの言葉をできるだけそのまま使うという形で訳すしかなくて、それから、英語などの詩のおもしろさの中心の一つである、いわゆる「ライムー韻をふむ」を日本語にうつすということも、ほんとうに偶然の奇跡でもない限り不可能だし、だいたい日本人に脚韻を感じる耳、感覚がないんですね。だから、僕が『ことばあそびうた』でやったように、だじやれとか、そういうものに近い位しつこく言葉を合わせていかないと、何か韻として感じられないようなところがあるか

ら、仮に、『マザーグース』の韻というものを日本語に同じようにうつし変えても、それは意味がないだろうと思うのです。

それで、できないことが多いということをお前提として僕がとった態度は、日本語で読んだ場合に、印刷されたもので読まなくても、口伝えで耳で聞いて伝えられるようにわかり易いということね。もう一つは何かの、できれば詩的感動を持たせたいということですね。詩的というのは僕は割と広い意味にとつていて、例えば単に詩的情緒ということだけではなくて、言葉の弾みの方の面白さとかシンソンのものが非常にユーモラスであるとか、あるいは一つのテーマを直載に言っているとか、そういうことまで含めて言うわけですね。とにかく日本語として何らかの魅力を持つて成立しているものにしたいです。そのために僕が自分に課したルールの一つは、全部をひらがなで訳すということな

んです。

これは結果的に誰でも読めるという面を持っていてけれど、ひらがな訳ということ、我々日本人が一番古くから持っている大和言葉の日本語にすることができないのではないかと。つまりひらがなを課すと、あまり漢字的な単語や文脈は使えなくなるわけですね。漢文脈というのはどうしても中国からの輸入品で、いまだにやや外国語的な所があると僕は感じているわけで、そういう漢文訳はできるだけ避け、とにかくひらがなを使った。

それから、二千年来何故か日本人の体の生理を支配している七五調というものを一つのテクニクとしたってこともある。でも七五調というのにあまりこだわってしまると、僕なんか生理的にどうしても反発してきちゃうわけね。だからパロディーなんかにはしない限りは、あまりきちんとした七五なんて使えないんで、七五を中心とした

ルーズな、つまり六八かそういうものも含めて、とにかく今の日本人の言語における音感の最大公約数というものをできるだけ大切にするという態度ですね。そういう二つ——ひらがなと、七五を中心としたリズムということをまずルールとして、自分でやっていたと感しますね。

質問者 一つの詩からリズムとか、その持っている意味とかうたわれている内容とかの面白さが全部一緒に伝わるわけですが、訳された時は、この詩はリズムは全部写せないがシーンが面白いから写せるといふふうに思われたのですか。

谷川氏 おそらく一編一編の詩については本能的に選択していると思います。マザーグースには遊びを伴ったものが沢山あって、例えば「あつあつのまめのおかゆ」は「せっせっせ」なんです。つまり二拍子

で読めるわけです。もし日本語に訳した場合にも、できるだけ二拍子に乗り易いように訳した方がいいわけね。でも、そう考え出すと、有名なメロディーがついているものはそのメロディーに合わせて符わりでできるように訳さなければいけなくなるんです。それらは一応念頭に置かないで僕は訳したわけですが、二拍子のものは、日本語が意外にいい加減で適当に長くのばせばいくらかでも二拍子になっちゃうわけね。だから僕の訳詩でも「せっせっせ」で遊べると思う。

ただ他のもので、完全に「韻」から来た発想というものが原詩にはあるわけね。例えばある一つの行があって、次の行が全然意味としてはつながらないのだけど、韻としての音でつながっているから読んだ場合にすぐ頭にはいって、逆に音でつながっている所で意味上のナンセンスが非常に面白いというのが、原詩にあるわけね。こうい

うのは韻としてつながらない日本語にした場合にも、わりと生きる場合があるんです。つまり、原詩の場合には韻でつながっている必然性があるから、逆に言えばわりと普通にきこえるのだけれど、日本語にするとその韻の必然性がなくなるから非常に意味的にぎくしゃくしたものになったり、あるいはナンセンスになったり、ということはあるわけね。だからそれはそれで、おそらく与える語感としては違うものになるのだけれど、成立するのではないかと考えました。まあ逆に韻でつながっているから何かものの組み合わせが突拍子なくも通じるわけですよ。それで僕もあまり物の組み合わせがわからない場合は、ちょっとふりがなふってね、英語の韻とはこうなっているのだと、暗示したようなものもありますけどね。それなんか、子どもが読んで喜んでいるのを見ると、全体のプロットそのものもおもしろいし、内容がとつても

突拍子もなくておもしろいというので、必ずしも、韻が生きなれば詩として生きないともいえないみたいね。

質問二 谷川さんは様々なお仕事の中かなりの部分を子どものために詩を翻訳したり創作するのに使っていらっしやいますね。何故それほど児童文学にうちこんでいらっしやるのでしょうか。それから、詩には子どもの好きな詩と大人の好きな詩があります、その観点の違いをどうお考えになりますか。

谷川氏 後の問題についてだけ、大人は何か詩という一つの固定観念みたいなものができていると思うんですね。それで、僕にもその固定観念がある程度、勘という形であるんだけど、それをできるだけ形

の上では壊していきたいし、なんかこう既成の観念ではなくて自分で新しく作ってきたいという、変な野心があるんだ。だからいつでも自分の詩の形を壊していくだけだ。そうじゃなくて、詩っていうのはこういうものだって、すごく純粋に考えていらっしやる方もあると思うんですね。それが子どもにとって魅力あることかどうかってあまり考えないで。ただ自分が子どもの時代を思い出して、自分がこういう風に純粋な気持ちだったって書けば、それが子どもにとっていいんだ、みたいなことなんじゃないかと思うことがあるわけね。それでつまり、子どもも確かにおもしろいっていうものもあるわけですよ。具体的にいえば、まだみちおさんのお書きになるものは僕はすごく好きなんだけど、ああいうものの中で成功しているものは、まださん別に子どもを意識しているわけではなくて、本当に自分が楽しくて書いているんだ

けど、子どもも喜んでると思うわけね。そうでなくて、子どもを褒め意識して子どもにこういう世界を与えてやるうとか、こういう世界を大事に伝えていこうという目的意識を持ちすぎると、詩というものは、えてしてつまんなくなっちゃうんだね。だから、まず書いている詩人自身がおもしろがって書かないと絶対だめだと思わなきゃ。だからもし、子どもが魅力を感じないとすれば、簡単に言うとな作者が自分の既成概念で子どもというものを捉えすぎてる気がします。

もう一つは、いわゆる言葉遊び的な詩の側面を我々はどうも少し軽蔑してきたことですね。詩を考える上で、いつも高村光太郎とか萩原朔太郎とかボードレールとかリルケというところで考えていて、わらべ歌とかだじゃれとかなぞなぞという所で考えてなかったのも関係があると思いますね。それは教育の世界での問題で、なぞな

ぞにしる早口言葉にしるわらべ歌にしる、僕たちは国語の授業でおそわったことはいね。せいぜいなぞなぞ位ね。国語ではとってもきれいな、きちんとした言いまわしの日本語ばかり習っている。だから子どもにとっては自分の表現がそこに託せなくてね。子どものサブカルチャーというのは、それこそ悪口歌とか替え歌とかそういう所に言語活動の大部分があったんじゃないかなあ。そこにある二重性があったと思うんですね。そういうものは、メインカルチャー、サブカルチャーというものじゃなくて、日本語の言語活動の中では一つのものなのだから、もっと教育の現場などでも取り入れなくてはいけないと思うんですけどね。そういうふうには詩をきれいに捉えている部分が随分あると思う。子どもの現実にもっと本気で触れてみると、子どもの言語活動とは、かならずしもきれいごとだけではないってことがよくわかると思う。

それから、大人が考えている感動的なポエジーより、もっと卑俗なのかもしれないけど、駄洒落とか地口って次元で意外に子どもはおもしろがってるってことは、テレビのCMを見ていれば一目瞭然だと思っただすね。それは、一人一人の詩人の子どもの捉え方とか、詩というものの捉え方の違いだから一概にどうとは言えないけれど。それから僕が何故子どものものを書くかということについてだけ、僕はなにも一生懸命努力してそれをやっているわけじゃないんです。友だちにこの間指摘されて驚いたんですけど、子どもの関係の本がいつのまにかふえてたんですよ。最初は子どものための歌の作詞っていうのがあって、これは自分の子どもができる前からやっていたんです。なんか自分の中の子どもの部分を生かすってことが僕はいつでも楽しいんですね。自分で楽しいから書いてたし、童謡ってのはある程度商品化して扱われるとこ

があって、自分の生活のためにも書いてました。子どものためにお話を書くようになってのは、やっぱり自分に子どもができてからですね。一番初めにできた子を見てると、やっぱり子どもってのはすごく面白いし、それで、その子の名前をとった『けんはへっちゃら』を書いたんです。下の女の子が生まれたら、アニキのだけ書いてくと不公平だって後で恨まれるんじゃないかと……それで、『しのはきよろきよろ』ってのを書いて、その中でしのが現実と言ったことなんかも適当にとり入れて、義理を果たしたわけですね。それ以来、いくつか書いたんですけど、僕は物語っていうのはどっちかって言うとか苦手ですね。初め、僕は写真に興味があって、写真展の批評なんかして、それから自分で写真をとって『絵本』という詩集を出したんです。絵本という形式には前から本当に興味があったわけね。その写真からテレビの仕

事とか記録映画の仕事、東京オリピックで市川昆さんに出会ったりなんかして映画の脚本の仕事をしたりすることが、僕を絵本に近づけたと思うんです。だから絵本は児童文学としてより、一つのメディアと捉えているんです、僕の中では。写真のためのフォトストーリーを女性週刊誌のために何度かやったりしたんだけど、それらの延長として、子どものための絵本もあつたんです。

もう一方の流れとしては、例えば「人間家族展」という写真展から出てきて、人間の生きている現実がどういう風にドキュメンタリーとして捉えられるかという、記録映画の考え方から科学絵本のものがあると思うんですね。科学絵本ってのはよくない言葉だけど、つまり物語絵本じゃない知識絵本とでも言うのかな。僕の場合、知識絵本と言ってもできるだけ子どもを楽しませたいという気持ちが強くて働いてしまうか

ら、必ずしも客観的に正確な知識を与えるのではなくて、むしろ現実をできるだけ新鮮な切り口で子どもに見せてやるという意識が強いです。僕は子どもの時、百科事典がすごく好きで、絵本がわりに読んでたってことも少し関係していると思うんだけど。

それから、マザーグースをひらがなで訳したのと同じことで、ひらがなだけで子どものための少し長い詩を書きたいって気持ちがあるんです。結局自分で楽しいからやっているので、子どもものを書く時は、自分の中の抑圧した幼児の部分解放できるからカタルジスがあるんですよ。もう一つはさっきも少し話したけれど、子どもに向かってこういうことを伝えたいって気持ちもやはりどうしてもあるんですね。大人として。それが実は大人相手に書くよりもはるかに難しい……。何故かという、子どもに書くにはやさしく書かなくち

ゃいけないからね。ひらがなだけで書くとか漢字を使わないで書くことは、余程考えがつきつめられて、自分がある程度理解していないと書けないわけです。例えば、子どもに「思想」という言葉は難しすぎる場合、なんて言葉で伝えるかって時に、「思想」とは果たして「考え」でいいのかという問題が出てきます。それでは思うことと、考えるということがどのように違うか、とすごく物事の基本にさかのぼって考えなきゃいけないことが随分出て来ますね。そんな意味で、子どものために書くことは、相当挑戦的とも言えるか、僕のためにもなっているんです。

(一九七六・七・一六)

